

発言者	発言概要	カテゴリ
鎌倉委員	自分自身が都立図書館を利用する際は、数時間調べ物をして、資料作成まで行う。電源や音のコントロールを含め、仕事がここでコンプリートするまでをサポートする、ワーキングやコーリング的な要素を期待する。	利用環境整備 全般
坂口委員	現在は「調べる」に重点を置く、でよいが、個人的に、将来的には調べる→ものづくり、までをサポートする装置があればいいと思う。	利用環境整備 全般
中井委員	利用者がグループで来て使う、ということのためには、図書館側が何か仕掛けたりする必要があるかもしれない。	利用環境整備 全般
坂口委員	和泉図書館では階が変わるごとに書架、カーペットの色が変わっていく。静けさを色で表現している。そうした環境が利用者の「利用の仕方」を変えていく。	利用環境整備 全般
鎌倉委員	現在は、1階カフェにはふらっと入っても、その先にあるのはやはり「調査研究」。ふらっと本を借りることはできない。 調べ物をしたいけれど、まだ図書館という選択肢がない方に利用を促すか、どういう利用環境なら調べやすいのか、が当初の焦点だった。 都立図書館が調べ物に役に立つ、ということならば、1階スペースを広報的にも利用し、（利用者自身が）調べることに焦点を置けるようなワンクションがあり、施設で快適に調べ物をする、という点をもう少し考えていきたい。	利用環境整備 全般
小田議長	「快適」という点について。鎌倉委員、川原田委員の発言を受けると、これは機能的な意味での快適さ、という点を強調したほうがいい。 「仕事ができ、成果がまとめられる」というのは大事なポイントになりそうだと思う。	「快適」について
森委員	利用者がどういうふうに「快適」ととらえるか、は研究していかなければいけないのではないかな。	「快適」について
富澤委員	5階閲覧室は積極的に勉強したい人や使い慣れている人には、電源の有無やパソコン使用の可否などがわかるが、そうでない人は気軽に使えない。 「○階以上はOK,○階以下はダメ」というシンプルな案内のほうが敷居が低くなるのではないかな。	ゾーニング
富澤委員	5階は静かな閲覧席と、キッズルームやカフェテリアなど音が出る空間が同じフロアにあり、わかりにくい。利用者からはその点について意見は出ていないのかな。	ゾーニング
管理部長	5階において静と動の空間があるのは今の課題。エレベータ前で電話が使えるようになっており、その声が閲覧室に漏れる、という意見は頂いており、図書館としても課題だと思っている。	ゾーニング

中央図書館長	5階はサイレントだからそれ以上作れない、となるとそこで止まってしまうので、作ってみてどういう声があるか、そこからどうするか、と考えている。5階については他にも、今できる範囲のことをやろうと考えている。また、ドッグパーキングなど、可能な範囲での工夫を始めている。	ゾーニング
中井委員	現在の施設ベースで考えるなら書架を減らして閲覧環境を充実させていくしかないのではないか。一方、施設を新しくする議論ができるなら、200万冊開架までダイナミックに考えてもいいのではないか。	開架について
川原田委員	200万冊オール開架は、刺激的、飛躍的な案。ほかにない量なのでぜひ行ってもらいたいと感じる。ただし現施設では実現できないのではないか。一部の書庫をアクセス可能にして、現スペースの中で利用できるよになるとよい。	開架について
中井委員	200万冊開架は、実際に見てみたい、体感したいという願望。 現在の施設での実現は厳しいと考える。 ただ、大学図書館では閉架はなくなり、学生が中に入って利用するようになっている。都立においても、現在の施設において全部は無理としても、閉架の中に利用者が入っていくことはできるのではないか。	開架について
小田議長	200万冊開架について。 施設としての実現可能性とは別に、役割ということでの実現可能性は十分あるのではないか。国会図書館はさすがにすべて開架はあり得ない。都立だからこそ踏み出せる可能性はあり得る。	開架について
松本副議長	浦安市立図書館では、開架のほかに開架書庫（利用者が自由にアクセスできる）、完全な閉架書庫と分けている。200万冊開架についても、幾つかグルーピングすると利用者のアクセスの便がよいのではないか。	開架について
小田議長	案1のほうが夢が語れてよいが、実現は難しい。書庫の開放という方向性がひとつの可能性か。利用の頻度などで区分するというのは、施設面とも関わってくるため、委員の立場では語れないが。	開架について
企画経営課長	書庫の開放について。中央図書館の書庫は主に地下にあり、利用者が入る想定でのつくりではない。量的にもきちきちの状況。	開架について
小田議長	もし閲覧席を削ったら書架を増やせるか？仮に開架：閲覧席＝4：1とすると1がざっと10～20万冊。現在の35万冊に加えると50万冊台。やはり書庫が課題となる。	開架について
中井委員	閲覧席は、「すき間を増やす」「席のバリエーションを増やす」という点を狙いとして、席数を減らしていく方向性になるのではないかと。椅子をぎゅうぎゅうに並べず間引いてよい。間引いたところに本棚を入れるということはあってもよいが。 現在の閲覧席は固まっているので、もう少し分散させてあげたい。	開架について
中井委員	利用行動の調査から感じるのは、「4時間同じ席ではすわれない」ということ。利用者は移動する。いろいろな席のバリエーションをつくってあげたい。	開架について

小田議長	(閲覧席を間引きすると) 来館者がますます減るのではないか。	開架について
坂口委員	入館者減の現状を受け、むしろ席にゆとりをもたせて居心地よくしたほうが、逆に入館者が増えるのではないか。和泉図書館の経験からも、席にバリエーションを持たせるほうがよい。本は増える一方なので限界がある。人間に焦点を合わせたほうがいい。	開架について
川原田委員	音のコントロールについて。現在の施設で区切りをつくることも必要だが、建物は入口の雰囲気、入る人の立ち居振る舞いが決まってくる。今すぐの改善は難しいと思うが、次の段階(建替え?)においては入口の雰囲気について、議論してほしい。	エントランスの雰囲気・活用
小田議長	中央図書館の1階はカフェで柔らかいイメージになった反面、図書館ではないようにも見える。図書館らしさとは何なのか、追究しないといけない。	エントランスの雰囲気・活用
富澤委員	ロンドンのブリティッシュライブラリーは1, 2階がパブリックなスペースで展示やカフェもある。このように図書館を使わない人もアクセスしやすいものがあると、図書館に触れる機会になる。現在の中央図書館の1階カフェは親しみやすいが、展示などは入館手続きをしないと見られない。	エントランスの雰囲気・活用
中井委員	カフェや受付について。もうすこしウエルカムな感じ、取組をやってもいいのではないか。通りがかりの人にみてもらえる仕掛けはできるのではないか。	エントランスの雰囲気・活用
小田議長	エントランスのカフェやロッカーエリアについて、展示への導入スペースをつくるなどの作り替えは可能なのか?	エントランスの雰囲気・活用
中央図書館長	エントランスは、生じる音が閲覧室に聞こえてくるという課題がある。完全防音にして何かをする、というのは非常に難しい。閲覧席も考え方を考える必要が出てくる。逆にいえば「何でもできる」わけではないが、何かをやってみて、ということならできなくはない。	エントランスの雰囲気・活用
坂口委員	エントランスのカフェが良くなり、「司書のおすすめ本」は図書館らしいと思うが、さらに図書館の中へいざなうアイデアがあるといい。あそこの取組は、ショールーム、ショーウィンドウなので、さらに上手くつかってほしい。貴重書の複製を置き、館内で見られることをガイドするなど。今も、こつこつやっているのはすごくわかる。	エントランスの雰囲気・活用
松本副議長	取組時期について。既存の施設を前提とするか、施設を新しくするかの前提がない状態では議論がづらい状況にある。A1は施設面で難しい点もあると聞いているが、A-2からB4までは施設を変えなくてもできるものもあるのではないか。	実現可能性

企画経営課長	<p>机等の入替という点は予算の範囲内で対応できる。</p> <p>ゾーニングは大幅な変更は難しいが、5階の運用を若干変えるなどは検討の範囲内。</p> <p>電源は、施設・設備面で問題がある。</p> <p>VPNやコンソーシアム構築による電子書籍の提供は、すぐにできるものではなく、実現可能性をこれから探っていく段階と感じる。技術面、予算面の制約もかなりあると思う。</p>	実現可能性
森委員	<p>児童・生徒に都立図書館をもっと使わせたい。都立図書館の場所は限られるので長期休業時にイベントがあるとありがたい。子供たちにも「知的刺激」を味わわせてあげたい。</p>	児童・生徒
森委員	<p>現在の中央図書館は、ちょっとよそよそしいところもある。小学生が来ても「（自分には）関係ない」と思う子は外に出て行ってしまおうかと思う。</p>	児童・生徒
小田議長	<p>子供たちは距離的にもなかなか来られない。遠隔的なサポートも重要な要素になるか。</p>	児童・生徒
中井委員	<p>貸出がないことで、中央図書館は利用者層が高年齢層に偏っているということはある。その偏りが、都立の「売り」なのか、問題・課題なのか、今後考えていくべき。</p>	利用者層
川原田委員	<p>利用者層について。利用者は、「他の利用者が何をしているか、その立ち居振る舞い」を見て、影響を受ける。それが図書館の資料だけではない魅力と考える。都立は資料を調べたり作ったりする利用者が多い。こうした利用者がある図書館を使ったことがない人々にも、こういう場が開かれると刺激を受け、自分もやってみようという感じになるのではないか。</p>	利用者層
森委員	<p>区立図書館と都立図書館では利用者層が違う、と思う。</p> <p>また、入口の雰囲気や立ち居振る舞いが決まるというのも、そうか、と思う。</p>	利用者層
森委員	<p>「東京散歩学」の各回はすべて定員の100名が来たのか。（→情報サービス課長が各回150名程度参加、と説明。）</p> <p>区立図書館で講演会をすると、難しいテーマでも参加者が多い。参加者が講師とかなり専門的なやりとりをする場面もあった。</p> <p>150名の中にはたまたま来た人もいるのではないか。そうした人たち、潜在的なニーズをターゲットにすることも必要と思う。</p>	利用者層
小田議長	<p>訪日外国人に対するいろいろなサービス活動などは、利用者属性部会での検討になるか。</p>	その他
小田議長	<p>課題として「利用者数減少」が挙げられているが、利用者数（来館者数）を指標にするのは限界が見えているのではないか。どれだけ滞在したか、という点も都立図書館の特性からすれば重要なのではないか。</p>	その他

小田議長	27期提言では2020年までの実験的な時期と位置付けた。きょうの発言もヒントに、失敗しても構わないので、先につながっていくことを見据えるのが大事。	その他
小田議長	本日、入口近くが何となく違う、と感じた理由がドッグパーキングだった。だが、それが伝わっていない、というところが広報の課題。「犬は入れないが、連れて行っても大丈夫」ということが伝わるだけでも随分イメージが変わるのではないか。	その他
小田議長	A1-3の2案は結論が出せる状態ではないが、実現可能性にも触れ、また利用者層の話題も出たのでその点も含め、大筋の枠組みとしてはこれで進めることでよいか。	まとめ